

インタビュー
コーナー

会員であることが患者さんの信頼増大につながる地区医師会を目指したい。



八重山地区医師会長
上原 秀政 先生

Q1. この度は、八重山地区医師会長にご就任おめでとうございます。会長に就任されてのご感想と今後の抱負をお聞かせ下さい。

私は八重山に生まれ高校まで八重山で過ごし医師となって5年目で八重山に帰り今年でもう23年になる。これまでの人生はほとんど地元、八重山で過ごし、医療に限らず八重山の良い点、悪い点を経験してきた。それらの経験をこれからの医師会活動に生かせたらとまずは思う。

八重山地区医師会は歴史ある組織だが平成18年12月に社団法人となって社会的に法人格を有する責任ある組織として再スタートを切った。体制も不備なところが多く社会的にもまだまだ幼児のような存在である。八重山地区住民の医師会に対する期待が高いことを考えると地区医師会長に就任することははっきり言って私にとって荷が重い気がしている。

地域住民やマスコミの考えている医師会像と現在の八重山地区医師会の実態とはだいぶ開きがあり、そのギャップを埋めようと背伸びしている自分自身に気づかされる時がある。特に最近の新型インフルエンザ騒ぎでは医師会に対するまわりの期待の大きさに戸惑うことも多い。しかし八重山の地域医療を担うリーダー的役割を考えると逃げてはならないことで、しっかり

した見地から適切に対応し住民がパニックに陥らないよう導いていかななくてはならない。最新の情報のもとに出来るだけの質の高い医療を提供できるよう努力しなければと思う。八重山地区医師会は地域住民と個々の会員医師を結ぶ「架け橋」的な存在であるべき。私自身も医院の診療を抱えながらの医師会活動であるが他の理事のメンバーの協力を得ながら時間の許す限り活動していきたい。これまで地理的なハンディからなかなか参加しづらかった県医師会主催の会議などにも八重山地区医師会の代表としてできるだけ参加していくつもりである。宮城信雄会長をはじめ理事の先生方、他の地区医師会の先生方、ご指導ご鞭撻よろしく申し上げます。

Q2. 八重山地区医師会が法人化して2年が経ち、組織力が強化されたと思いますが、医師会での具体的な活動をお聞かせいただけますか。また、特に力を入れている取り組み等がありましたら教えて下さい。

医師会の活動には有償のものと無償のものがあるが有償のものには市から委託される集団予防接種とか校医検診などがある。それらは法人化されるずっと以前から医師会会員が中心になり執り行ってきたし、当然これからも会員の協力を得ながら継続してやっていかねばならな

い。問題は無償の活動、たとえば石垣島マラソン大会や石垣島トライアスロン大会での救護班としての活動である。忙しい日々の診療の隙間をぬってボランティア活動を行うのはよほど崇高な精神が必要で、協力を要請する側としてもなかなか頼みにくく協力者探しにいつも苦労しているのが実情。しかし医師会の公益性を目指すという理念からすれば、それらの活動こそ非営利性組織の神髄が問われることになる。だから決しておろそかにすべきでない。そのためには日頃の会員の先生方と連絡交流を密にしておく必要がある。

あと特に力を入れている取り組みは、収入の増大を図ること。活発な医師会活動のためには十分な活動資金が必要で、そのために今年度より会費値上げを行い、新入会員のみならず現在の会員全員からの入会金の徴収を行った。幸い会員の理解が得られスムーズに決議されたがそれでも年間収入が会費のみの500万円というのは充実した医師会活動のためにはまだまだ少ない。他の地区医師会のやり方も参考にしながら例えば集団予防接種委託料の何割かを充てるとかささらなる増収を図っていくつもりである。また八重山で開業していながら医師会に入会していないところがある。入会を勧誘すると同時に医師会に所属しているメリットを増大していきたい。会員であることが患者さんの信頼増大につながる、というような地域住民の尊敬を集める地区医師会を目指したい。つまりは医師会組織の基礎体制づくりが私に課せられた医師会長としての役割と思っている。

Q3. 離島医療の現状と今後の課題について先生のお考えをお聞かせいただけますか。特に離島での医師不足・看護師不足はかなり深刻化しているとおもいますが、昨年、県が打ち出しました県立病院の独立行政法人化の方針について、どのようにお考えでしょうか。

県立八重山病院内科勤務時代に平成2年と平成11年、計2年間、小浜診療所での離島医療を

経験した。平成2年の時はまるっきり一からのスタートで事務もおらず看護婦と二人で受け付けを初めレセ作成など何から何までやり続けた。約束の1年間の勤務の後、後続の医師がなかなか探せなかったり小浜公民館長の勤務継続要請などが出されたりして島を離れるのに苦労したが今となっては懐かしい思い出である。身をもって離島医療の困難さは知っているつもりだし離島医療の詳細な問題点も他の医師よりは理解していると自負している。そのような経験をこれからの医師会活動にも生かしていきたい。

昨年11月29日、八重山で初めて地区医師会連絡協議会が開催され、その時に発表されたが八重山で医療に従事している中で八重山出身者の占める割合が極端に少ないことが指摘された。理事の中からも郡内にある三つの高校の生徒を啓蒙し少しでも多くの生徒が医療関係の仕事を目指すように進路指導の教諭やPTAにも働きかけたらどうかという意見が出された。まだ具体的に動き出してはいないが医療を目指す地元出身の若者が増えれば八重山にリターンしてくる医師や看護師が増えることにつながる。そういう長い目を持って医師不足、看護師不足に対応していきたい。

県立病院の独立行政法人化問題に関してはやはり昨年11月の地区医師会連絡協議会の場において八重山地区医師会の総意見として独法化反対を表明している。私自身、県立八重山病院に長年勤務していた経験上県立病院における経営体質のどこに問題があるかある程度は理解しているつもりである。沖縄県は3年間の猶予期間の後2012年に独法化を目指すとしている。私自身は根本的には宮古、八重山病院に関しては本島の他の県立病院とは別個に考えて欲しいという気持ちであるが県立病院の財政赤字をなんとかせねばという県の立場も一県民として理解できなくはない。難しいところである。八重山病院もあくまで独法化反対の立場を貫くのであれば、まずは幹部と職員が一丸となって県病院事業局の経営再建計画に沿って経営健全化を目指すべきである。そしてその結果独法化しな

いですむようになることを願っている。

Q4. 八重山の文芸同人誌「邂逅」の編集に携わっておられるようですが、関わった経緯や文芸同人誌の紹介をして頂けますでしょうか。

同人誌「邂逅」は郷土の詩人、八重洋一郎さんの呼びかけで平成元年から始まった。私は事務局の宮良直充さんに誘われて平成2年の第2号から参加している。今年4月に発行された第17号が最新号。寄稿はエッセイがほとんどで、何も書かないで人生を終わるよりたとえ駄文であっても何かを残したいという自己保存本能、そしていったん始めたからには最後（目標は20号）までやり遂げようという意地で毎回寄稿している。同人数人が編集人を交代で務め、スポンサーや広告を持たないほとんど自費出版に近い発行形式だが、私は第14、15、16の3号の編集を担当した。八重山は音楽や踊り、野球などのスポーツ活動は盛んだが、文芸の分野ではこの「邂逅」が唯一連続発行されている文芸誌である。同人各々の職業は様々であるが不定期に開催される集会では共通の趣味の文芸話で大

いに盛り上がる。様々な立場の人のいろいろな意見も聞けて視野が開ける。

また医師会の先輩、宮良長和先生も古くからの同人メンバーの一人で、数年前には沖縄タイムス社から「立腹のススメ」というタイトルの単行本も出されているが、毎回風刺が利いてユーモアも感じられる読み応えのあるエッセイを寄稿されている。

Q5. 最後に日頃の健康法、ご趣味、座右の銘等がございましたらお聞かせください。

健康法：夕方仕事を終え、週2回ほどの割合でバナナ公園などをスロージョギング（3km位）していたが、最近は時間がとりにくく週1回がやっと。

趣味：読書、最近は歴史物が好きで司馬遼太郎の「坂の上の雲」を読み終えたばかり。その他、釣りと三味線（八重山民謡）。

座右の銘：「無為自然」（老子）

この度は、インタビューへご回答いただき、誠にありがとうございました。

インタビュアー：広報担当理事 當銘 正彦

